教化計画スローガン
真のよりどころを明らかにしよう

高田教区報

響流

第108号

発行所
上越市寺町２丁目24－4
真宗大谷派 高田教務所
編集　響流編集委員会
発行　村手淳照
印刷　文化印刷㈱

第15回真宗同朋の会全国推進員交流研修会

盛り上がった推進員全国交流研修会

高田教区推進員連絡協議会連合会会長　川原貞治

第十五回全国推進員交流研修会が去る十月二十三日から二十五日まで上越で行なわれました。

当日の参加者は推進員二百五名と東北連区の教導さんなど二十二名でした。そのうち高田教区の参加者は推進員四十七名、助言者六名でした。

研修会のテーマは「真宗門徒の自立と連帯」御流罪八百年―親鸞の道を生きる―でした。講師は十三組浄泉寺住職の井上円師でした。

三日間、四回にわたって行なわれた井上先生の講義は、史実や『教行信証』などを根拠に、承元の法難によって越後に流罪となられた親鸞聖人は「主上臣下、法に背き義に違し、忿を成し怨みを結ぶ」とまで怒り、念仏の弾圧に抗議して立ち上がり、無知文盲で貧困にあえぐ越後の農民と共に生活し、恵信尼公や子供達と共に生活するなかから、浄土真宗の哲理を深めていかれたことや、大乗仏教こそ、自然の道理であり、その道理によって生きようとされた聖人の結婚は必然であった。愚禿親鸞と名のられた越後の地こそ浄土真宗発祥の地であると、三日間にわたってお話し下さいました。

二日目は六台のバスに分乗して居多ヶ浜・鏡ヶ池・竹之内草庵・日の丸名号・国府別院・光源寺・浄興寺・高田別院と巡拝しました。各所では、各自動車に添乗下さった若いお坊さんや各寺院の御住職様から親切な説明をいただくことができました。本当に親鸞聖人を身近に感ずる一日となりました。

夜は二日間生活を共にした参加者が班別にテーブルに付かせていただき、楽しく懇親会を行うことができました。

宴会は盛り上がり、多くの皆さんは来春の御流罪八百年の法要に友達をさそってまた越後へ来て、恵信尼の里や報盡碑をお参りしたいものだと言っていました。

三日目も井上先生の講座が行なわれました。その後、全国協議会が開かれましたが、このときも全国の各寺で、同朋の会をつくり、新しい青年層の推進協への参加を実現し、寺へのお参りがふえるよう、お互いに努力しようという声がおこりました。

そして「また来年お会いしましょう。」と盛り上がった散会となりました。

第十五回真宗同朋の会　全国推進員交流研修会

去る十月二十三日から二十五日まで、第十五回真宗同朋の会全国推進員交流研修会（真宗同朋の会全国推進員連絡協議会主催・東北連区当番）が高田教区を会場に開催され、全国各地から二百五名の推進員が参加した。

「【真宗門徒の自立と連帯】御流罪八百年―親鸞の道を生きる―」をテーマとした今回は、講師に井上円師（第十三組浄泉寺住職）をお迎えし、御流罪の意義や史実等について学んだ。また御旧跡参拝では、居多ヶ浜、竹之内草庵、光源寺など宗祖ゆかりの地を巡り、三日間を通じて有意義な交流研修会となった。

全国推進員交流研修会に参加して

第六組金光寺門徒　**斎藤喜代治**

推進員の自覚と活動に大きな願いがかけられております。そのため「真宗門徒の自立と連帯」をテーマにした推進員交流研修会が毎年行われ、全国からお集まりの皆さんが念仏者としての交流をされることは、まことに有意義なことと思います。

このたびは親鸞聖人が念仏弾圧で師法然上人とともに連座して越後国府に遠流されてから二〇〇七年には八百年を迎えるときにあたり、「御流罪八百年―親鸞の道を生きる―」と題して、高田教区十三組浄泉寺住職井上円師の講義は時宜に合ったものと思いました。

講義では『教行信証』「流罪記録」「夢告」などに基づく、先生の研究を交えながらのお話に感動を覚えました。特に越後国府に流罪になってから常陸へ行かれる七年間の流罪の身ながら、命がけの念仏を称えられ「非僧非俗」に立ち「愚禿親鸞」を名告られたお話に感動しました。

おわりに、このたびの研修会には高田教区と関係者の心配りに感謝いたします。

全国推進員交流研修会に参加して

第十二組明善寺門徒　**八木　司**

平成十八年十月二十三日から二十五日まで、全国推進員交流研修会が上越市直江津のホテルセンチュリーイカヤを会場にして開催されました。

主催は真宗同朋の会全国推進員連絡協議会、当番は東北連区ですが、開催の実務は、高田教区が担当いたしました。推進員各組代表者会議を月一回のペースで開き、橘教導のご指導のもと、企画作りを進めました。

来年で御流罪八百年、「親鸞聖人御流罪の地」での研修会であることを強く意識して欲しいという願いを込めて開催案内文を発送しました。

北海道の教区から熊本・長崎の教区まで、地元高田教区を含め推進員は二百五名の参加、三日間の研修会を支えて下さる教団関係者・各教区教導の方々等二十二名。

研修会の骨格をなすのは、井上円先生の三日間、四時間の講義と二日目の大半を費やしたバスでの御旧跡参拝であります。

井上円先生は、教行信証・歎異抄などに記されている承元の法難の流罪記録などを読み解かれ、綽空から善信（ぜんしん）、還俗させられて藤井善信（ふじいよしざね）、自らを愚禿親鸞と名乗られた子細について説かれました。在家とともにある大乗仏教を確立され、念仏で全ての人が救われる。これらを後世に伝える使命を担われたのが「親鸞」という名号の意味だとのこと。難解な点もありましたが、深くて新しい角度からのお話を頂いたと思います。

御旧跡参拝は、雨が心配されましたが、それほどのことはなく、七班に分かれて、居多ヶ浜・竹之内草庵・光源寺・竹之前草庵・浄興寺・高田別院と宗門の初期の歴史を刻む大切な遺産ばかり。光源寺では、御満悦の御真影・恵信尼連座の名号・流人標札、浄興寺では本願寺歴代門首からの書状・親鸞聖人本廟・宗祖自筆六字名号など、御流罪のこの地でなければ拝せないものばかり、見学者に感銘を与えたと思います。改めて浄土真宗が流罪のこの地から始まったことを感じます。

勤行では、正信偈を唱和いたしました。二日目の夕事勤行から声が揃いだし、三日目晨朝勤行は二百人の声がよく和して心地よいお勤めだったと思います。会場設営と運営を受け持った教区の一員として、各位のご協力で意義ある研修会を持てたことに感謝いたしております。

御流罪八百年特別研修

御流罪八百年特別研修について

主任　北條　頼宗

来年（二〇〇七年）、宗祖親鸞聖人越後御流罪八百年をお迎えするにあたり、宗祖がその身に受けられた法難・流罪をあらためて学びなおすこととし、一人ひとりが宗祖に出遇っていくことをテーマとして、昨年度から「御流罪八百年特別研修」をおこなってまいりました。受講者は、自ら学ぼうと意欲を起こされた十六名の方々で、月一回（夜七時～十時過ぎ）のペースで学習をおこなっています。

この研修を通して私が受講生の皆さんに望むことは、学習の中、あるいは普段の生活の中で感じたこと、気付いたこと、疑問になったことをまず教えの言葉に還り、そして自分の言葉で表現できるようになってもらいたいということです。毎回勤行の後、順番におこなっている感話も、毎回終了後に書いてもらっているレポートも、そういう学びとしてお願いしています。

学習の仕方については、昨年度は初めてということもあり、私と宮本さんが交互に問題提起をおこない、班別座談というようなかたちでした。今年度からは受講生が自ら学び問題提起していくことを大事にしながら、和田稠先生の「流罪と靖国」を学んでいます。

この研修も残すところあと半年となりましたが、共に学びあう関係が開かれ、さらに展開していくことを願っています。

受講者の声

第六組西光寺　豊島　信

私は今まで御流罪ということが親鸞聖人にどのような影響があったのか、ということを深く学んだことがなかった。ただ歴史の一頁としての認識しかなかった。今回この「御流罪八百年特別研修」を受講して、この御流罪ということが親鸞聖人はもちろん、現在の真宗教団にまで大きく影響していることを学ばせて頂いた。御流罪後の越後の生活の中で親鸞聖人は、「うみかわに、あみをひき、つりをして、世をわたるものも、野やまに、ししをかり、とりをとりて、いのちをつぐともがらも、あきないをもし、田畠（でんぱく）をつくりてすぐるひと」たちとの生活によって、都で生活していた自身とそこに住む「いなかの人々」を無意識のうちに差別していた自分を見返された。当時の一般の世界からは「石、瓦、礫」のごとく思われていた、文字をも知らぬ、いなかの人々との出遇いによって、教化しようと思っていた親鸞聖人が逆に教化される。観念的な教えから親鸞聖人自身も含め、田舎の人々一人ひとりのところへ届く生きた教えが実践的に展開されたのだと思う。そういうところから、僧や俗、教化するものされるもの、師弟というような枠組みを超えた中に親鸞聖人は身をおいた。それは共に仏弟子として教えを共に聞いていくという立場である。御流罪後、愚禿を名告った親鸞聖人を私達は学んでいる。私はこの学びにおいて、いつの間にか無意識のうちに、「愚者」にならねばならぬと思っていた。親鸞聖人の教えを聞き、努力を重ねて愚者になろうとしていた。しかし、私の愚者というのは、実は聖教を忘れ、自分の勝手な解釈で人を説ききかせ、みだりに浄論をくわだて、己が才と勘違いする「賢」だった。親鸞聖人のいう「愚」というのは、まさに私が目指してなろうとする、その「賢」だったのである。

賢者の信を聞きて、愚禿が心を顕す。
賢者の信は、内は賢にして外は愚なり。
愚禿が心は、内は愚にして外は賢なり。
（『愚禿抄』）

私は親鸞聖人という人をいつの間にか偶像化し、どこか遠いところにおいてしまっていた。しかし親鸞聖人はあくまで私達と同じ目線で、煩悩具足の救われがたき身として、生涯にわたって聞法していかれたのである。

第一組本立寺　**渡辺　慎和**

「明日の目的の為に今日を生きるのではない。今日がすべてだ。」とは、安田理深先生の言葉であったと学習会で聞きました。

私はその言葉を「人は、生きる為に生きるのだ」と、解釈しました。

まさに、親鸞聖人が御流罪に遇い、たどり着いた越後の人々の生き様そのもののように思います。

それは、決して美しい意味ではなくて、「今日生きる事に命懸け」だという風に思ったわけで、それが、吉水の中で優雅に学んでおられた親鸞聖人にとって、どれ程ショックな出来事であったか、想像に難くないです。

テキストの中には「教化しようと思っていた者が、逆に教化されていく」というように書かれていましたが、私はむしろ、親鸞聖人の自尊心がたたきのめされていく、自分がただの知恵者であっただけだと思い知らされていく中で、学び自体を転換せざるを得ない程、越後の人々の生活が辛辣であったのではないかなと思いました。でなければ「愚者としての目覚め」に至るには、なかなか及ばないと思います。

その越後にあって、今現在の私は大変幸せに生きているので、当時がどれ程命懸けで生きなければならないものだったのか思いは及びませんが、少なくともこの私よりは、ただ生きていく事の難しさ、忙しさを解っていて、はるかに生きるという事に誠実だったのではないかと思います。

そのような人々に出会い「教化しようと思っていた者が、逆に教化されていく」「愚禿釈親鸞の誕生」であったのかなと思います。

そういえば、京都で学習している間、よく竹中智秀先生が言っておられました。

「命は誰のものか。」

御流罪学習に行く度に、その言葉を思い出します。

他人の意向で殺された命。殺されても念仏申すと言って殺された命。それはすなわち先生いわく「命の所有化」であり、親鸞聖人はそこを出て、御流罪の地の人々に会い、ただ一心に生きる人々の中にこそ、その答えを見出したのかなとも思います。

ただ、私がそこに思い至るには、学び自体が未熟で、まだまだ「愚者の名乗り」も上げられそうにありませんが、ありったけの自尊心を込めて、何とか三十五歳までにはそこに至りたいなと思う今日この頃です。

第五組林覺寺　**直江　智成**

親鸞聖人が御流罪に成られてから来年で八百年になります。高田教区では数年前から来年の八百年目ということをひとつの機会として様々な準備がされています。その中で私は「御流罪特別研修」という学習会に参加させていただいております。

流罪と一言でいったときには、歴史年表に記される流罪ということや、罪という概念で流罪ということを考えたときには、私たちはその罪を相対的にとらえることができると思います。しかし、私たち真宗門徒にとっての流罪ということを考えたときには、相対的な視点だけでの流罪であったのでしょうか。様々な視点から、この流罪ということを考えることができると思いますが、私は、親鸞聖人が流罪にまでなり、今日まで浄土真宗として伝承されてきている精神を考えなければならないと思います。

私たちは、親鸞在世当時の時代背景を知ることができても、その中で生きた人たちの精神的な部分を身で感じることはできません。しかし、聖教の言葉や歴史文献等を読み考えていく中で知ること、或は、考えられる中で感じていける世界はあると思います。

何故親鸞聖人が流罪になったのかということもありますが、流罪という形にまでなったその精神を問うていくこと、そのことを私は今のこの「御流罪特別研修」という学習会の中で考えていくきっかけをいただいたと思っています。

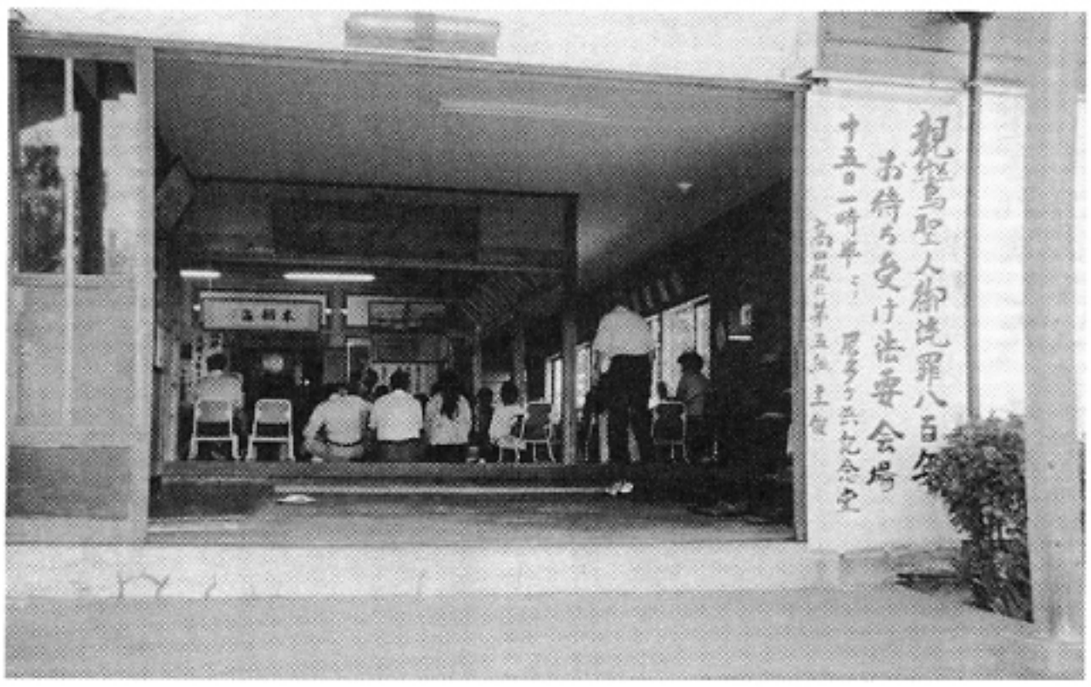
また来年に向けて様々な準備がされているということもありますし、その中で感じさせていただく部分もありますが、来年の八百年という一つのきっかけで終わるのではなく、私たちが八百年という節目の年に携われる喜びと共に、そこから新たにはじまっていくことも大切なことなのではないかと思います。

第五組 親鸞聖人御流罪八百年
お待ち受け法要と記念講演の開催

第五組組長　横山　良一

今年の五月十一日、高田別院において真宗教学学会高田大会が「御流罪八百年弾圧を超えて」と題して、盛大に開催されたことは記憶に新しいことと思います。

地元である高田教区第五組においては、「御流罪八百年お待ち受け法要と記念講演」を他に先駆けて、親鸞聖人上陸ゆかりの地、居多ヶ浜記念堂にてぜひ実施したいという声が上がり、去る九月十五日に盛大におこなわれました。



法要は、組内全寺院が出仕し、大勢のご門徒、推進員、寺族の方々で記念堂が満堂となり、『正信偈』を高らかに唱和しました。

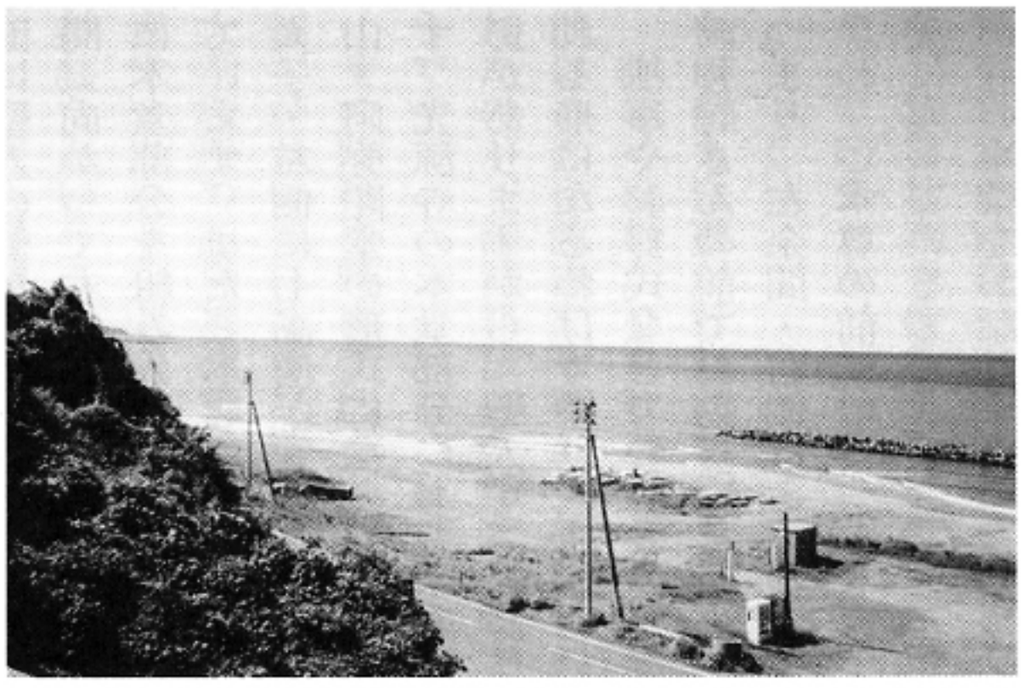
さらに、記念講演として、宮本亮環師（榮恩寺住職）をお招きして「流罪を生きた親鸞聖人」と題した講演をしていただきました。

主な講演内容は、親鸞聖人が赦免され常陸の国へ行かれるまでの七年間を、妻である恵信尼や子供たちと共に「いなかの人々」として生活されたお話を中心にしていただきました。

当地居多ヶ浜は、越後七不思議片葉の芦をはじめ、タンポポ、水仙、アザミ、どてかんぞうが群生しております。海風に負けない自然の花が凛々として生きて、一年を通して浜を彩ります。生きることと死ぬことをしっかりと心得ている花であり、法然上人や親鸞聖人の称えた「自然法爾の念仏」の世界に通じているような気がします。

今、私達が見ている青い空は、親鸞聖人の見られた海と全く同じイメージで少しも変わっていない。そこから親鸞聖人の体験を追体験できるのです。このご縁をいただいた上陸の地で法要を営むことができたということは、最高の幸せでありました。

来年は、高田教区主催の法要が営まれ、記念事業が開催されます。皆様のご協力を賜りますようお願いいたします。



寺院クローズアップ

第五組光源寺（上越市五智）は聖人御満悦の御影が伝わっていることもあり、来年五月に厳修される宗祖親鸞聖人御流罪八百年法要の会場に予定されました。今回は住職の堀前惠裕氏にお話をうかがいました。

◆法要の会場となったわけですが。

親鸞聖人御流罪八百年法要の五月の会場を、光源寺とすることが教区で決定されました。それを私どもが受ける形になったわけです。

そのきっかけは、本堂の仕組にあるかと思います。

◆光源寺の由来を教えてください。

言い伝えでは、開基は源氏の武将木曽義仲の家臣で、聖人の教えに触れ武士の位を捨ててお弟子となり覚円坊最信と名乗った、堀徳兵衛光政という者だとされています。聖人は赦免後に関東に向かわれますが、最信は教えを伝えるため、同行せずに残ったと伝えられています。それは居多ヶ浜よりも二～三キロ西にある「虫生岩戸」という場所で、前崎館の国道を挟んで山側あたりになるでしょうか。

その後の詳しい文献は無いのですが、江戸時代の中期に天災により堂宇が崩壊したとされています。その天災から百年の空白を経て、嘉永年間に今の五智に移りました。

五智は終戦までそのほとんどが国分寺と居多神社の寺領でしたから、何らかの形で譲っていただいたのだろうと思います。そのため、本堂裏には国分寺時代の無縁墓が見られます。

現在の場所へ移って百五十年ほど経ちますが、その際に聖人ご満悦の御影を厨子に安置した御影堂をたて、それを光源寺が護持させていただくという形になったようです。

堂内には直江津を今町と呼んだ頃の永代経の札が並んでいますが、光源寺の直接のお檀家でないお宅や他門の方々のものもあります。御影堂に対する崇敬の念の表れだと思います。

◆流罪赦免御満悦御真影とは。

聖人の流罪が赦免されたときのご満悦の姿を伝えているというこの御影は、もともと本山にあったそうです。その後、ある時代に下付されたものだと聞いています。御影の上にある讃文には正信偈の一部分「本願名号正生業」から「如衆水入海一味」までの十二句が書かれています。その字は覚如上人が書かれたものといわれていますが、真偽のほどは分かりません。

お召しになっている衣は流罪着を仕立て直したといわれる衣で、流罪着の色をしています。右のほう三分の一のところに筋が入っているのですが、これは生地のつなぎ目で、修復を重ねるうちに縫い目のところが広がってきてしまったのですね。

◆本山の援助などはありましたか。

ほとんどなかったと思います。しかし江戸末期にはお西の国府（小丸山）別院が立てられたのに対して、対応する東の旧跡寺院が流罪の地・居多ヶ浜のそばにないということはありましたから、東西分派以降の教団の意向みたいなものが反映されたのではないかと思います。

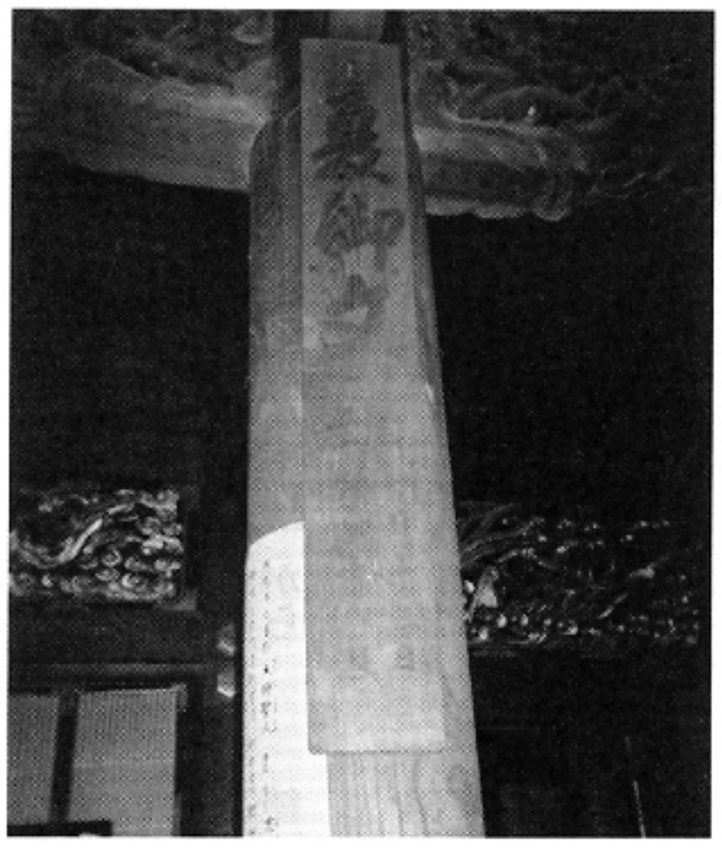
国府別院は本間に二尊が並列・併設した形で、前卓も二つあるわけです。一方ここは御影堂が主・中心であり、光源寺がそれをお護り申し上げるという形になっています。そのため本来ご本尊があるべき本間の正面に聖人の御影が御安置され、左余間（向かって右余間）にあたる部分に本堂部分を組み入れた形式になっています。またご本尊の右側に聖徳太子・左側に七高僧が安置され、本山・阿弥陀堂の形式にならっています。光源寺の本堂部分にも聖人の御影がありますから、聖人が二人おられる形になるわけです。

法事やお葬式などでのお寺参りは、阿弥陀さんの前でお勤めいたします。つまり、左余間・右側によるわけですね。ご本尊の前にいるつもりで中央に座っている方に、「実は…。」とお寺の事情をお話しすることもあり

ます。二万近い真宗寺院の中でも、かなり特殊な例ではないかと思います。

◆他に特殊なところは。

真如上人の時代に、本山の直接の抱え地になったという表現があります。別院に順ずる、いわゆる「御坊」の格を与えられたということです。高田別院の支院という形で、高田教区内でいうと稲田の光明寺と同じ扱いで、「国府御坊」となったわけです。昭和二十年にはその関係を解消することになりますが、御坊の名残として夏の御文や二十八日講の看板が残っています。



夏の御文の看板

◆報恩講はどうされていますか。

「国府御坊」として八月二十八日に、御影堂の報恩講をお引き上げの形で、引上会として行っていました。その頃は高田別院の輪番・列座が来られて、輪番調声・外陣つとめをしたそうです。支院関係を解消した現在は正面に住職が座って自ら磬を打つという形で、寺のものだけで外陣勤めをします。

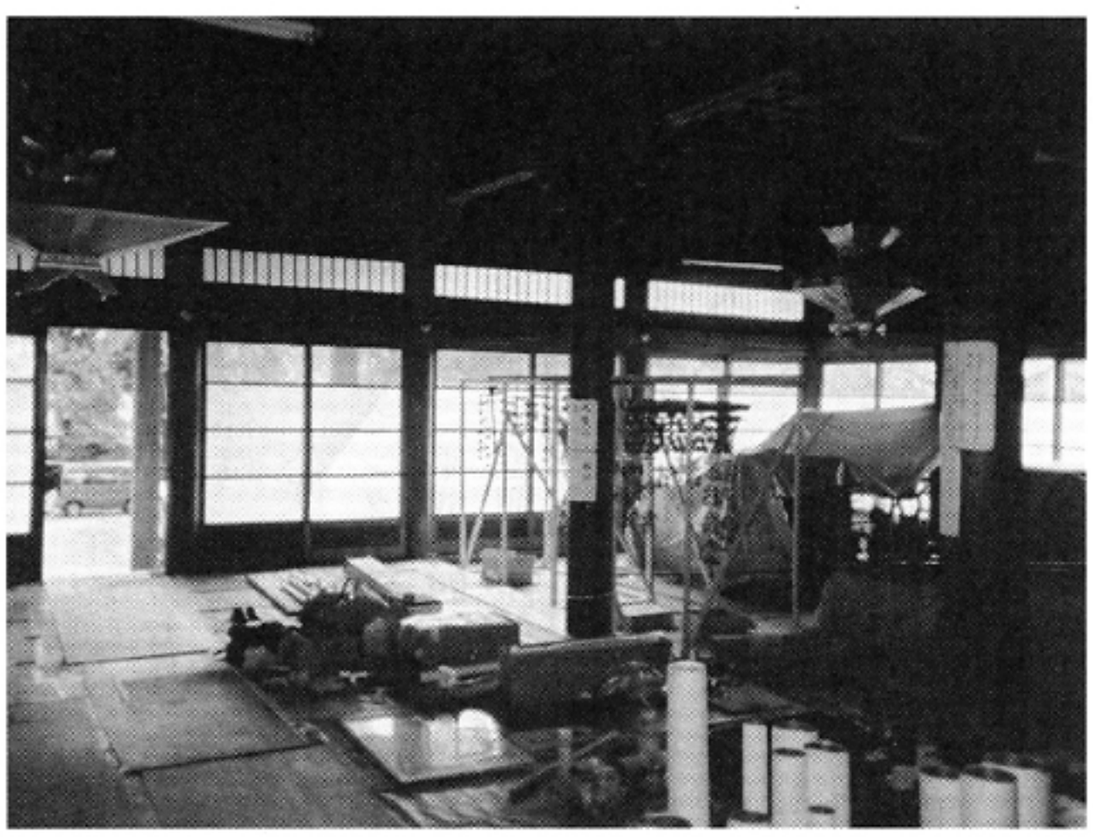
一方、光源寺の報恩講は十一月二十七・二十八日と御正当で行っています。この高田教区では今でも御正当にされるお寺が多いようですね。御正当は光源寺の報恩講ですから本来なら光源寺の本堂部分、つまり左余間（向かって右余間）で行うべきでしょうが、それでは寺院方も参詣も右に寄る形になってしまいます。そこで申し訳ないことですが、末寺の報恩講ながら御影堂のほうで勤めさせていただいています。

このような形をとっていますから、引上会も御正当も両尊前をお荘厳しますね。名前は違いますが、報恩講を二回行っているわけです。門徒さんに対する案内でも、「夏の引上会(御影堂の報恩講)」と「御正当（光源寺の報恩講）」の二つを勤める特別なお寺です、とお話しています。

◆本堂を修復すると聞きましたが。

引上会後の八月末から始めた内陣の修復は、十一月までに終わる予定です。昨年のうちに御影堂の床の張替えは済ませ、現在は本間の壁や柱や長押を修復しています。今回は御流罪法要ですが、寺の本堂部分（左余間）についても手を加えています。このような機会が無いと修復するということはありませんからいいご縁なのですが、いざ修復をはじめるとあちこち追加費用がかさみ、頭の痛いことです。

法宝物もそのまま置かれているのでもったいないといわれるのですが、法宝物庫を作るまでにはまだいたっていません。



◆以前も法要が行われたそうですね。

詳しくはわかりませんが、五十年前にこの光源寺で七百五十年が行われたのが、御流罪法要の始まりのようです。

その時は当時の新門さん（大谷光紹）がおいでになり、藤島達朗大谷大学教授の記念講演があり、全国仏青やスカウトなどが中心となって行われたということです。また、当時の直江津市に全面的にバックアップしていただいたようです。

今回の上越市は政教分離の問題がありますから直接的には何もありませんが、史跡整備という形で様々な支援をしてくださっているのではないかと思います。コンベンション協会の動きは、ずいぶん前からありましたね。五年ほど前から親鸞聖人御上陸八百年ということで、市を挙げてのイベントにしようという雰囲気があると思います。

ぜひ、教区をあげての法要を勤め上げたいと思います。

教区「同和協議会」の現状報告

「同和協議会」委員
第十一組福楽寺　井上　博

去る十月十二日(木)、『同和協議会』の名称変更問題について」と題して、本山の「解放運動推進本部」から、本部委員の雨森慶為氏を招請し、当教区の「同和協議会」（以下、「協議会」という）との懇談会がもたれました。

『同和』という言葉に問題がある」と、公には一九八九（平成元）年「真宗大谷派糾弾会」の席上、差別を受け続けている人たちから指摘をされ、その結果、本山では二年前「同和推進本部」から「解放運動推進本部」へと名称変更がなされました。

このようなことから、現在の当教区における「協議会」の動き、あるいは県内のいまだに続く差別事件、「同和」という言葉の問題等に触れ、「協議会」の一員として現状をご報告できればと思います。

現在、当教区においては「協議会」が主体となり、年一回の「同和問題研修会」と、数回の「学習会」がもたれ、相互の研鑽がなされています。

「同和問題研修会」は、いつごろから始まったのか定かではありませんが、おそらく一九六七（昭和四十二）年の「難波別院輪番差別事件」を契機として、一九七二（昭和四十七）年「教区同和協議会」が設置されましたので、それ以降と思われますが、教区で年間事業として予算化され、続けられてきている事業です。

一方、「学習会」は、それまで「協議会」会員個々が集まって関係書物の輪読などを行ってきましたが、三年ほど前から、教区の「同和問題研修会」の枠を広げていただき、外部から講師を招いての継続した「学習会」が持てるようになりました。現在は、二〇〇二（平成十四）年三月に発足した「新潟県人権・同和センター」のご協力をいただき、「同和」問題の現実に学ぶという視点を大切に、県内の差別事象・歴史に重点を置いて学びを続けています。しかし、「研修会」「学習会」のいずれも公開であるにもかかわらず、出席者が少ないのが残念でなりません。

「同和」問題（「部落」差別問題）は、過去のものでも県外のことでもなく、現実に、県内の学校現場での差別、結婚差別、就職差別、インターネット上での差別落書きなど、数え上げたらきりがないほどの差別事件が起こっています。

一九七〇（昭和四十五）年の「糸魚川結婚差別事件」以降、今年七月までの県内の差別事件は、明らかになったものだけで五十八件あります。

（県人権・同和センター調べ）

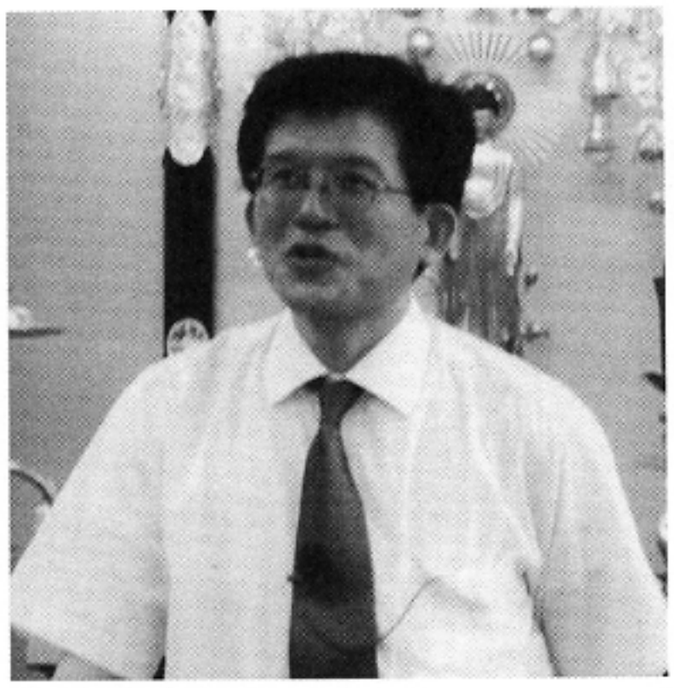
この内、二〇〇二（平成十四）年以降だけで二十七件の差別事件があり、この事件のほとんどが、中学校の歴史教育で学んだ「罪人起源説」（「被差別部落」の人々は元罪人であったという何の根拠もない説）がもととなっての高校生による差別表記・落書きであり、教師・生徒に対する「同和」教育の必要性を訴える事件であります。

一九九七（平成九）年四月、部落解放同盟A支部に加盟しているB子さんは、交際男性から突然「（母親の強い要望で）C町の女性とは付き合えないし、結婚もできない。」と言われました。ショックを受けた彼女は、「なぜC町に生まれただけで……。」という思いを持ちながらも友達の励ましもあり、立ち直ることができました。そして、翌九八年九月、新潟市で開催された「第十五回部落解放新潟県研究集会」で、辛く悲しい思いを報告されました。結婚差別は厳然としてあるのです。

さて、「同和」という言葉についてですが、これは、昭和天皇即位のときの勅語からきており、「同情融和」「同胞一和」という意味合いを持つ言葉であるといわれています。つまり「日本国民はすべて天皇の赤子であり、その同じ赤子に差別があってはならない。天皇の大御心にかえることが差別をなくしていくことになる」という「天皇制融和主義」がもとになっております。それは、「一人ひとりが、一人ひとりであるということによって尊い」とする浄土真宗の人間観、平等間とは相容れないものでありましょう。しかし、一般的には「同和問題」「同和地区」「同和事業」などと使われ続け、大谷派においても「同和推進本部」「同和協議会」という名称で使われ続けてきました。ただ、本山では二年前、宗務総長の諮問を受け、「同和審議会」から「具申書」が出され、結果的に「解放運動推進本部」と名称変更がなされました。（『真宗』二〇〇四年七月号掲載）

当教区においても、初出のごとく話し合いが持たれており、ただ単に名称を変更すれば済むという問題ではありませんが、いずれ結論が出されることと存じます。皆様のご意見をお寄せください。

教学研修会より



教学研修会（鎮西良昭主任）では親鸞聖人の作成された御和讃の購読を通して、真宗の教義に触れ、日常の生活の中に深めるを目的に『三帖和讃』の中の『讃阿弥陀仏偈和讃』講義を年二回受講している。

講師は三木彰円氏（大谷大学専任講師）。先生を高田教区にお迎えしたのは今から七年前。現在東本願寺出版部から発行されている増補真宗大谷派勤行集（青色の勤行集）の編纂を宗務担当者から依頼されたことで、高田教区でも講義を依頼し実現したもの。八月二十八・二十九日の両日、高田別院の御食堂で講義がおこなわれた。

講義も後半部で「阿弥陀仏に帰依することは浄土である正報と衣報に帰することにもなるが、世尊我一心の一心によって一向専修が明確にならないと、どこに帰るのかはっきりしない。聖人は凡夫の身に立ち、教えに帰して従ってゆく、という立場から読みとられたのではないか。」と位置づけ。

四十七首、四十八首では「至心回向とは至心の人のこと。至心の人とは如来の人のこと。この如来の人と歓喜する真実信心の人の重なりの所に仏が仏になってゆく。手を合わす私が誕生するが、そこに手をあわされる如来がいる。回向があり、帰依がある。帰依するがゆえの回向である。

聖人にとって四十八首の御和讃を作ることは仏慧（大慈と大悲）と功徳をほむることであり、十方の有縁に聞かしめることの願い、と受けとめられているのではないか。」

講義を終えられ「聖人は自分の作った和讃に自分が導かれていくことを知っていたのではないか。」と自身の感想を述べ、「御和讃は繰り返し繰り返し口にしていくことが大切です。」と結んだ。

次回は真宗聖典の四八三頁の『浄土和讃』から。（南）

得度研修会より

高田教区教化委員会の得度研修会（堀前惠裕主任）は今年九月までの一年間の得度受式者を対象に、東本願寺池の平青少年センターを会場として一泊研修を実施した。

この研修は真宗本廟（東本願寺）で得度（とくど）を受式し、新しく僧侶（新発意（しんぼっち））の誕生）として名告りをあげたことを喜ぶと共に、得度受式だけでは習得できない所作法を身につけることを願いに教区が独自に企画実施してきた研修会で今年で四年目になる。

会場の池の平にもようやく涼風が吹き始めた九月二日から三日までの両日に実施され、参加者は前年受式者を含め、七名が参加。

講師は教区准堂衆会会員であり、長年別院列座役として勤務する経験豊富な石黒恵史氏と津島勇彰氏。

研修会では袈裟の種類、名称、持ち物、履き物と続き、装束の着用、たたみ方、本堂の荘厳、外陣作法を習得。

中でも袈裟の威儀（いぎ）の結び方の練習ではすぐには身に付かない様子で、付き添いの保護者もいっしょに参加し、なごやかな研修会になった。

初日の夜は、村手所長も多忙の中駆けつけて、教区からの記念品を手渡し「得度受式おめでとうございます。あなた方の誕生をみんなで待っていました。これからが本番です。教区もお寺もあなた方を支えていきます。」と励ました。

主催した関係者は「新発意とは単に職業としての僧侶が誕生したことを意味するのではなく、佛の願いが成就したことを意味し、願いをかけている仏さまや先達がいて、その願いを受けとめ、得度を喜ぶ者が誕生したことが確認されることですから、本当に喜ぶべきことなんです。ただ本人達がその喜びを自覚するのはすこし時間がかかるんでしょうけど」と微笑みながら見守っていた。（南）

参加者のひろば

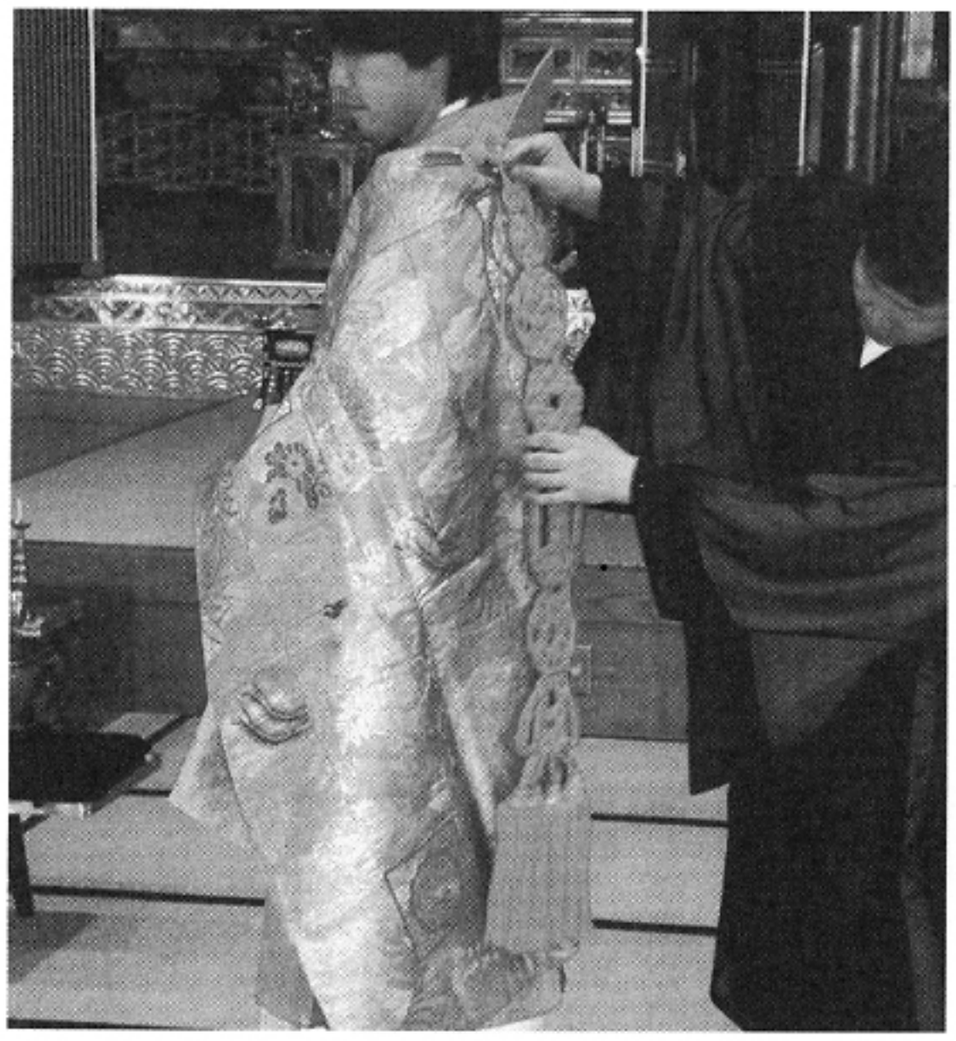
教区声明講習より

教区声明作法講習会に参加して

第八組浄音寺　**髙山　謙栄**

去る九月十一日・十二日、本山堂衆を講師に迎えての教区声明講習会が、高田別院本堂にて開催された。

今年度の講師である松村大栄師は参衆を勤められた経験もあるため、声明音楽的な講習よりも作法的な講習会となった。中でも七條の着用や修多羅のエビ（紐）の結び方は、教区内でもなかなか教わることのできない貴重な体験ができた講習会であった。



去年に引き続き、今年もご案内をいただいた時から参加したいという気持ちになっていました。この時期、別院の報恩講を控え、各組で講習会が計画されています。「皆さん張り切っているなあ。」と感じ、やはり報恩講は気合いが入ります。

思い起こせば昭和五十三年、父が退職して、親鸞聖人七百回御遠忌法要を勤める事になり、別院で国式伝授の講習会があり「それに出て、オレに教えろ。」と父に言われたのが第一歩でした。その後、毎年の報恩講もこの御遠忌の小規模なお勤めと思い、正式な形を見せていただいたのが、本人のやる気、張り合いにもなりました。文章ではなく直接指導していただける、恥をかかない程度にどこでも通じる作法を身につけたいと思っています。ありがとうございました。

真宗学院前期修練より

親鸞聖人と向き合いたい

第六組長命寺　**柴田貴美子**

修練の講師であった日野先生から圓徳寺前住職の藤元正樹先生のお言葉を紹介していただいた。「私の親鸞」という題の文章で、「六十才になるまで親鸞様に問い続けてきたが、何も応えてもらえなかった。まだ親鸞様に遇えない。」という内容である。

私が真宗学院に通い始めたのは、寺を継がなければならないという必要感からであった。しかし、学び始めると、浄土真宗の深さに戸惑いを感じ、大海に一人投げ出されたような心持ちであった。しかし、藤元先生のお言葉は、私に一筋の光を与えてくれた。私は親鸞聖人に出遇うために、学びを始めたのである。浄土真宗の寺に生まれながら、浄土真宗に背中を向けてきた私に、「そのままでいいのか。」と親鸞聖人が呼びかけてくださったのかもしれない。

私は、これから親鸞聖人と向き合っていきたい。聖人ゆかりの地に足を運び、真宗聖典を熟読し、聖人が私達に伝えようとしたことは何であるのか学び続けたい。修練は私の学びの原点を自覚させてくれた。

前期修練に出席して

第七組速念寺　**小島　英子**

去る九月十四日から九月二十日までの一週間、前期教師修練に参加させていただいた。受講者は男性十九名、女性十四名、計三十三名だった。

朝六時から夜の九時まで、自由時間は殆どなく、講義、攻究等が繰り返された。この修練は多くの先輩が、すでに通っていかれた道であると思うと感慨深いものがあった。

修練を終えて、ここから何が始まるのか――。おそらく、宗祖の〝教えに遇うことを生活の基本に据えて、生命（いのち）ある限り生きて行こう……〟（道場長講義）という覚悟を決めることなのだと思う。また、そのことが求められてもいるのだと思う。しかし、現在の私はまだ、その言葉の重たさを自分自身のこととして、しっかりと受け止めることができずにいる。

ただ、これからも謙虚な気持ちで、常にご門徒さんと同じ方向を見つめながら（何か特別な立場に立つというのではなく）、一歩一歩共に歩んでいきたいものと思う。

直江津駅に列車が入った。いつもの風景がいやに新鮮に感じられた。

伝道研修会より

回向発願心

第一組本立寺　**渡辺　慎和**

六日初日。夜の講義から出席しようと思い、大雨の中センターに到着。雨天強行の直江津方面の御旧跡参拝、皆様御苦労様でした。

夜、講義。井上先生のおだやかな口調と満腹感、それに昼間の疲労に危うく負けそうになりながら、二河白道の合喩段を『愚禿鈔』と照らし合わせ、解説していただきました。

七日二日目。午前の講義の後、板倉の御旧跡参拝。「ゑしんの里」の次に向かった「山寺薬師」では、二百余段の階段を前に少し帰りたくなり、それでも葛の花の薫り漂う山道を皆で歩き、「聖の窟」では眼下に見渡す聖人御流罪の地に、それぞれが想いを馳せ「この道を戻るのか…」とため息をもらしました。

八日最終日。二河白道の講義が完結し、それぞれ帰路へ。途中、名残り惜しんで予定の空いている者で昼食を食べに焼肉屋へ。「回向発願心！」と叫びながら上ロースをひっくり返す参加者の姿が印象的でした。

来年は秋のみの開催ですが、今から待ち遠しく思います。

女性のつどいより

第四組西勝寺　**江口　章子**

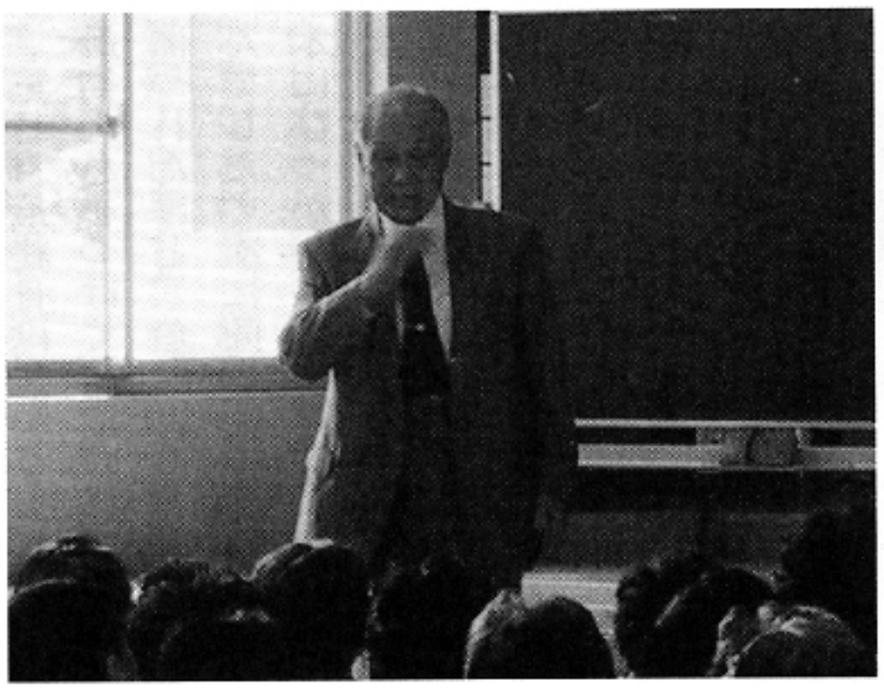
教区坊守会の年間行事のひとつである「女性の集い」が、十月二十四日に開催されました。

この行事は、我々坊守や寺族、そして門徒の方々と共に聞法しましょうと始められたものです。「聞法する」ということは、学んで知って、知ったことを身に付けていくことではなく、むしろ自分が持っていた先人観が壊されていくようなことで、気がつかなかった自分の問題を教えてもらうこと」とあるテキストにありました。そのような理由で、「女性の集い」では毎年、宗門関係の先生はもとより、各界で活躍されている方々を講師に招き、さまざまな立場からのお話をしていただきます。

今年の講師には、「新潟日報」に連載の「カッパの遠眼鏡」の筆者、蒲原宏先生をお願いしました。先生は、本願寺派の僧侶であり、元ガンセンター新潟病院の副院長もされたお医者さまであり、俳句の方でも活躍されている方です。「婆婆の上手な生き方」という課題で、先生ご自身の医者になられた経緯から始まり、幸福とは、自分（我）というものを見つけることから始まる。その幸福をどう捉えるかということを六つの条件をあげ、これまでの体験を支えて、解り易く、ユーモラスに話されました。二時間近くの講演がとても短く感じられました。

この日は又、「すずなの会」（若坊守の会）や各施設のはしやパン、手作り作品のチャリティーバザーも毎年おこなっております。今年も多くの方々から協力いただきました。施設のひとつ「やまびこ会」の皆さんによる器楽演奏もおこなわれ、演奏に合わせて会場の皆さんが歌声で応援してくださいました。

聞法あり、ふれあいありのそんな「女性の集い」です。



推進員養成講座より

第二組後期教習から

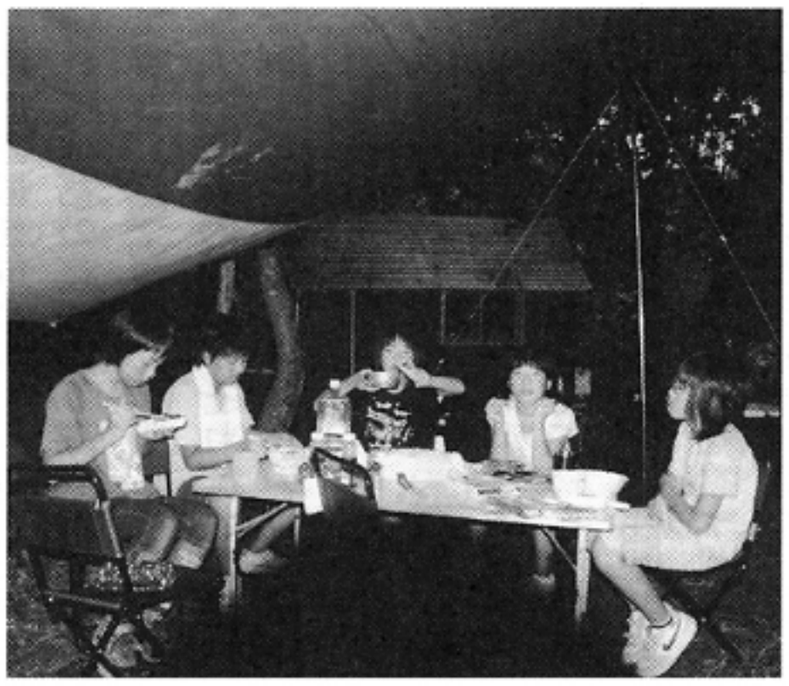
第二組善正寺　**上宮　修清**

第二組では、七月七～九日に後期教習を実施し、新たに十二名の推進員が誕生いたしました。教区指定の推進員養成講座（一九九八年）以来、五期目となり、約百五十名の推進員が誕生したことであります。

毎回のことながら、御真影の前での帰敬式・宣誓式、そして修了証の授与等に参加いたしますと、受講生はもちろん、我々引率スタッフもそれぞれの感動を頂くことができます。

今回、当寺では五十六歳と六十二歳の二人のご門徒が、新たに推進員となられました。この方たちは、約十年前に誕生した「善正寺群萌の会」の当初からの役員で、「推進員養成講座を受講せんかねー。」と毎回お勧めしてきた方です。帰敬式・宣誓式を後ろから見守りながら、「ここまで十年かかったなー。」という思いと共に、新たなスタートラインに立たれた喜びを私も頂くことができ、熱いものがこみ上げて参りました。親鸞聖人を始め多くの皆様方のご恩に心から感謝し、京都をあとにすることができました。

教区青少年キャンプ



去る八月二十一日～二十三日の日程で、第二十三回高田教区青少年キャンプ（実行委員長・繁原易）が、糸魚川市「森林公園」高ノ峰プラトーで実施された。

今回の企画担当は、西部地区（第一・二・三組）が行ない、糸魚川での開催ということで、翡翠（ヒスイ）をキーワードとし、「山と海にかこまれて、宝ものをさがそう」と呼びかけられた。

毎年心配される、台風（雨と風）であるが、日程第二日目の昼すぎ、青海海岸では集中豪雨にみまわれることとなったが、雨天での日程も考慮していたので、夜のキャンプファイヤーも、急遽室内でのキャンドルファイヤー（協力・大谷スカウト糸魚川第一団）に変更し、各班からのスタンツやゲームを交え、楽しい時をすごした。

夏のしあげはキャンプ

上越市（小学五年）　**笠原　愛**

私はキャンプで一番楽しかったことは、海辺に行ってヒスイ取りに行ってきた事です。私が拾った石は緑色の石でした。保倉さんが「ヒスイかもしれないね」と言っていました。その時はうれしかったです。

キャンプ場に着いた時に旗を作りました。すごく楽しかったです。夜のバーベキューもみんなで作っておいしかったです。

二日目の夜、カレーを食べました。すごくおいしかったです。雨でキャンプファイヤーができなかったけど、室内でキャンドルファイヤーができてよかったです。キャンドルファイヤーの時の出し物がすごくおもしろかったし楽しかったです。私たちの出し物は、「もも太郎Ⅱ」をやりました。私はナレーター役をしました。他の人の出し物をみて、うたをうたう五班さんなどすごくじょうずでした。

三日目最終日は魚つりをしました。最初えさをつけて池にいれて、すぐにつれたけど、魚はにげて取れませんでした。次に同じ所でやったら、木にひっかかって木がつれてしまいました。次に移動してちがう所でつりをしました。その時、黒いでかい魚をつろうとしたら、よくささってなくて、にがしてしまいました。来年も参加したいです。

はじめて参加した青少年キャンプ

糸魚川市（小学四年）　**滝川　優**

わたしは、はじめて青少年キャンプに参加しました。

このキャンプに参加して思いでに残ったことが二つあります。

一つ目は、友達ができたことです。同じ班の子と自こしょうかいをしてから女の子でニックネームをつけあって、そのニックネームでいつもよびあいました。とてもうれしかったです。

二つ目は、カレー作りです。班で作ったカレーは、家で食べるカレーとはちょっとちがってとてもおいしかったです。

こんかいはじめて二はく三日のキャンプに参加して、新しい友達にであったり、おおくのたいけんをしました。私にとって、とてもたいせつないい思いでになりました。来年も青少年キャンプに参加できたらいいなあといまからとても楽しみです。

いろいろとおせわしてくれたスタッフのみな様方ありがとうございました。

二〇〇六年度宗派経常費完納寺院

二〇〇六年度宗派経常費（相続講金・同朋会員志）を御進納頂き誠に有難うございます。ここに、早期完納いただきました御寺院名を御披露し、御礼にかえさせていただきます。

第1組
大雲寺　雲晴寺　長願寺　光徳寺
本立寺　寶光寺　清雲寺　圓照寺
常誓寺　西性寺　徳正寺　正覺寺
光照寺　勝蓮寺　廣傳寺　西光寺
専徳寺

第2組
善正寺　乗雲寺　法圓寺　東浄法寺
唯心寺　寶善寺　西福寺　興順寺
大蓮寺　常圓寺　陽嚴寺　萬徳寺
教念寺　明通寺　通託寺

第3組
西性寺　正願寺　明福寺　大泉寺
光榮寺　安專寺　正光寺　徳常寺

第4組
宗專寺　淨圓寺

第5組
流泉寺　光源寺　林正寺　善正寺
覚法寺　信光寺　忍西寺　寶善寺
蓮光寺　智願寺

第6組
照行寺（春日山）　勝念寺　福成寺　敬覺寺
等正寺　淨光寺　教專寺　金光寺
照行寺（東本町）　明法寺　善念寺　雲妙寺
安養寺　玉梅寺　照蓮寺　蓮受寺
養福寺　西安寺　明善寺　常榮寺
樹徳寺　了源寺　本淨寺　長樂寺
真宗寺　法林寺　淨國寺　長命寺
最尊寺　淨照寺　林西寺　長徳寺
光運寺　本覺寺　得願寺　願重寺
光照寺　唯願寺　善福寺　佛現寺
願清寺　佛性寺

第7組
皆遵寺　入善寺　正教寺　願樂寺
照光寺　良明寺　康源寺　道因寺
願生寺　誓願寺　善性寺　慶樂寺
宗顯寺　性顯寺　專了寺　圓常寺
西谷寺　靈山寺　福藏寺　願勝寺
敬覺寺　圓了寺　正行寺　長徳寺
明道寺　勝福寺　得法寺　淨善寺
光源寺　廣建寺（妙高）　明樂寺　覺願寺
慈雲寺　聞稱寺（関山）　淨嚴寺　正善寺（板倉区）
圓光寺　淨善寺　福因寺　西蓮寺
教蓮寺　正念寺　法泉寺　本龍寺
勝樂寺　本覺寺　妙土寺

第8組
長念寺　正福寺　養林寺　本覺寺
圓性寺　等覺寺　覺善寺　勝名寺
入光寺　延壽寺　阿彌陀寺　稱名寺
善巧寺　大嚴寺　淨音寺　蓮休寺
西方寺　法福寺　源長寺　淨琳寺
臨行寺　西養寺　向源寺　慈圓寺

第11組
照圓寺　鞍馬寺　敬覺寺　本教寺
高徳寺　妙玄寺　教願寺　稱專寺
能念寺　光圓寺　一念寺　福樂寺
高源寺　了慧寺　照源寺　京徳寺

第12組
善立寺　明善寺　明源寺　福正寺
永藏寺　正立寺　延慶寺　横超寺
西願寺

第13組
本敬寺　龍覺寺（荒浜）　信光寺　正法寺（頸城区）
淨泉寺　願專寺　最尊寺　淨嚴寺
明通寺　松橋寺　徳專寺（大潟区）　雙善寺
養性寺　西念寺　正法寺（頸城区）　養法寺
惠光寺　善照寺　正行寺　龍光寺
了僧寺　光遍寺　稱念寺　船入寺

（二〇〇六年七月一日～二〇〇六年十月十日）
以上二百十四カ寺

御遠忌御修復懇志金完納寺院

御遠忌御修復懇志金御依頼額を早期完納頂き誠に有難うございました。

ここに御寺院名を御披露し、御礼にかえさせていただきます。

第6組　善念寺
第7組　慶樂寺　光源寺
第8組　養林寺　善巧寺
第11組　稱專寺　福樂寺　高源寺
第13組　本敬寺

（二〇〇六年七月一日～二〇〇六年十月十日）
以上九カ寺

●おくやみ申し上げます

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

第7組　皆遵寺住職　草間　大道
第7組　明福寺前坊守　白鳥　芳江
第7組　照光寺住職　古見　惠純
第7組　光源寺住職　山﨑　順正
第13組　光遍寺前坊守　藤枝　キヨ

●おめでとうございます

◎住職就任
第3組　淨福寺　沼川　力
第7組　照光寺　古見　豊
第7組　正教寺　宮尾　慈
第8組　常光寺　堀川　賢

◎得度受式
第1組　光徳寺　水嶋　昭代
第6組　法林寺　水嶋　寛也
第6組　勝念寺　礪波　文子
第6組　長命寺　宜春　智弘
第6組　福成寺　柴田貴美子
第7組　福因寺　鎮西　渉
第7組　福藏寺　藤原貴美子
第7組　善性寺　越山　浩
第8組　願立寺　朝日　康隆
第11組　敬覺寺　草間　洋文
第13組　願專寺　白露　宏海
第13組　淨泉寺　經塚　彩子
井上　大

（二〇〇六年七月一日～二〇〇六年十月三十一日）
以上

新任挨拶

高田教務所嘱託　**老野生一義**

このたび、十月一日付をもちまして、高田教務所嘱託を拝命いたしました。

私は、本年七月まで約十一年間、宗務役員として本山に在職しておりましたが、一身上の都合で退職、自坊に戻っておりましたところ、このたびのご縁をいただいたことであります。

今年度、宗祖親鸞聖人御流罪八百年法要・記念大会並びに記念事業の開催に向けて、現在当教区をあげて様々な取り組みが進められております。このような最中、当教務所に勤めさせていただく責任の重さ、そしてありがたさを感じております。

当教区で生まれ育ったにもかかわらず、長年地元を離れており、大変お恥ずかしい話ですが教区内はおろか、自坊のご門徒の方々とのつながりも希薄でございました。

今後は、皆さま方のご指導ご鞭撻を賜りつつ、本山での経験を活かして微力を尽くしてまいる所存でございます。何卒よろしくお願い申しあげます。

僧籍　第三組光榮寺

不思議

人間の心で思いはかることも、言葉で言い表すこともできないことを、「不思議」という。「世にも不思議なことだ」などといって、不思議な事実やはたらきに、人は強い関心と興味をもつ。

宗教の本質も、その不思議性にあると考えて、人はしばしば宗教に、あるいは宗教者に、人智を超えた不思議な能力やはたらきを期待し、その力やはたらきによって、現実の問題を解決しようとするときがある。

しかし仏教は、基本的に自覚の宗教である。それは、仏の智慧に照らして自己を凝視し、自らの生存に目覚めたつ宗教である。生死苦悩の生を転じて、真実の生に立たしめようという、その本願のはたらきを「不思議」というのである。

親鸞は、五世紀の中国の学僧で中国浄土教の祖師・曇鸞の『浄土論註』の教えによって、

いつつの不思議をとくなかに
仏法不思議にしくぞなき
仏法不思議ということは
弥陀の弘誓になづけたり

と詠っている。奇蹟や奇怪の不思議ではなく、仏法が不思議である、と。阿弥陀仏が、すべての衆生を仏の国にあらしめたいと願い、もし生まれなければ仏は正覚を取らない、と誓い続ける本願のほかに、真の不思議はない、というのである。

さらに親鸞は、仏の本願との出遇いに開かれるものを、インドの大乗の論師・世親の教言に導かれて、次のように詠っている。

本願力にあいぬれば
むなしくすぐるひとぞなき
功徳の宝海みちみちて
煩悩の濁水へだてなし

「仏の国に生まれよ、もし生まれなければ、私は仏とはなるまい」と誓い、招喚する仏の本願にひとたび出遇うならば、いかなる人も、空しく過ぎる生の惨めさに打ち勝って、仏の功徳をこの身に賜わって生きるものとなる、というのである。空過する人生を転じて、仏の功徳を生きる生の誕生、このような生の転換、転成のほかに、不思議、不可思議とよぶ事実はあるまい。

（『仏教が生んだ日本語』大谷大学編　毎日新聞社刊より）

◆編集後記◆

今回の編集作業を終了して、ふっと気付くと、今年度の上半期が早くも終わろうとしています。この間、多くの教化事業が終了すると共に、来年に迫った「親鸞聖人御流罪八百年法要」に向けての準備が着々と進められています。

先般、御本山での学習会において、全国各地から参加された宗議会議員・教導・補導の方々とお話しする機会があり、「御流罪法要」の話題となりました。とある議員から「御流罪の法要は、当該教区が主となって行うんでしょ。私達は『親鸞聖人七五〇回御遠忌法要』の方が大事だから…。」とのご発言。また、多くの方々は「大事なこと」と認識されておられましたが、「法要までは…。」との感を受け、当教区から参加された方と共に驚き、当教区との温度差を感じずにはおれませんでした。

あと数ヶ月で「御流罪法要」をお迎えします。今一度、親鸞聖人の教えを学ぶ者として「御流罪」の受け取りを考え直さなければいけないのでは…、と思います。（菴澤）